

[課程一2]

審査の結果の要旨

氏名 佐藤 みほ

本研究は、家族のつながりを強め、子どもの予測可能感、永続感、安定性に対する認識を高め、日常のストレスフルイベントによる子どもの心身健康への影響を低減する要因として米国において重要視されている家族の習慣(family routines)に関する理論を援用し、英語版 **Family Routines Inventory** に基づき家族習慣尺度の作成を行い、高校生を対象に、幼少期における家族の習慣が学校帰属感覚を育む要因であることならびに、彼らの精神健康を守る上でも重要な要因であることを検証することを目的とした。家族習慣尺度の作成においては、中学生以下の子どもを少なくとも一人以上持つ母親 520 名を対象としたインターネット調査(調査 1)を 2007 年 5 月に、高校生の保護者 1539 名を対象とした郵送法による自記式質問紙調査(調査 2)を 2007 年 10 月から 11 月に実施した。また、幼少期における家族の習慣が、高校生時の学校帰属感覚ならびに高校入学以後の精神健康にもたらす影響の検討にあたっては、高校生 618 名を対象とした集合法による自記式質問紙調査を 2007 年 5 月、2009 年 3 月に実施した。また、調査 2 で得られたデータを用いて、親子ペアデータによる解析を実施した。解析の結果、以下の諸点が得られた。

1. 米国で開発された **FRI** に基づき、家族習慣尺度の作成を試み、高校生の保護者を対象として信頼性及び妥当性の検証を行った。得点化の方法については、**family routines** を行う頻度を表す頻度得点に、**family routines** に対する重要度認識を表す重要度得点を乗じる方法が望ましいと判断された。また、家族習慣尺度は、本邦においても高い信頼性が確認された。さらに、家族習慣尺度得点と、家族の凝集性や葛藤性との関連が示され、健康保持能力 **SOC** との関連も認められたことから、併存的妥当性が確認された。
2. 高校生とその保護者のペアデータを用いて、高校生を対象に、幼少期における家族の習慣と高校生時の学校帰属感覚との関連を検討した結果、男子については、小学生時における家庭での意思決定参加経験を媒介して、幼少期における家族の習慣が学校帰属感覚に間接効果をもたらすことが示された。また、女子については、小学生時における学校での意思決定参加経験を媒介して、幼少期における家族の習慣が学校帰属感覚に間接効果をもたらすことが示された。一方、幼少期における家族の習慣の形成度は、家族関係の質を高めることが示されたものの、学校帰属感覚への間接効果は認められなかった。
3. 高校生とその保護者のペアデータを用いて、高校生を対象に、幼少期における家族の

習慣の形成度、高校生時の学校帰属感覚、ならびに高校入学以後の精神健康との関連について解析を実施した。男女ともに、幼少期における家族の習慣の形成度により高められた高校生時の学校帰属感覚は、高校入学以後の精神健康に影響することが示された。

以上、本論文は、米国で提唱されている **family routines** の理論を導入し、家族習慣尺度の作成ならびに尺度の信頼性及び妥当性を検証し、幼少期の家族の習慣、高校生時の学校帰属感覚、高校入学以後の精神健康との関連を示した。本研究は、幼少期の家族の習慣の形成度が、思春期の学校適応を促し、精神健康を守るための支援策構築において、寄与するものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。